

(講演2) 限界集落における地域包括ケアシステムの取り組み —地域住民のエンパワメントに着眼して—

(Lecture 2) Constructing an Integrated Care System Focused on Empowering Community Residents

渡 辺 裕 一

Yuichi WATANABE

1. 自己紹介・研究フィールドについて

ただいまご紹介いただきました、武蔵野大学の渡辺と申します。どうぞよろしく申し上げます。武蔵野大学というのを皆さんご存じでしょうか。あんまりもしかしたらご存じない方も多いと思うのですが、私はこちらの大学にきて3年目終わるところでございます。住まいは、皆さん富士山ご存じかと思えますけれどもお出かけいただいたことありますでしょうか、富士山の麓に河口湖という湖があるのですが、その周辺に住んでおりまして、大学までは片道2時間程度かけて通っているという状況です。その中でやはり河口湖に住むということは、生活もそうですけれども今回こういうテーマで設定させていただいております限界集落の研究のフィールドも山梨県内にありまして、研究を引き続きやっていくということも含めて生活をそちらでしているということです。

自己紹介でお伝えしておきたいと思うのですが、私自身研究のテーマとしては高齢者の分野です。高齢者福祉の分野、それから地域福祉の分野、そして、ソーシャルワークということを基盤にして研究をしている。この三つを重ねあわせたところで研究をしているというのが私の専門分野になります。そこで研究しようと思ったその理由といいますか、ライフワークにしていることなののですが、私自身は120歳まで生きる予定にしています。120歳まで生きられるのかと皆さん疑問を感じられると思うのですが、生きられると思っています。自分の予定にしている訳ですが、ただ生きるだけではない。やはり私自身が主観的に、その120歳まで幸せに生きるということ、これを実現していかなければいけない。そこで、そのために何が必要なのかと、どういう風に社会を、地域を変えていければ120歳まで幸せに生きられる、そういうものが作っていけるのかということライフワークにしているわけです。その中でこの限界集落の研究というのがプロセスの中にあるということです。

とても私にとって大切なテーマを今回、皆さんからご提示をいただいて、話をさせていただくということで、ちょっと気持ちが入りすぎる人が多いのですが、がんばってお話をさせていただきたいと思いますのでよろしく申し上げます。

2. 限界集落研究の背景

與那嶺先生の話をお聞きして、自己決定の話でしたけれども、実は限界集落の地域包括ケアシステムの問題とかなり深く関わっていると思いつつ、お話を伺っていました。事前に少しディスカッションもご本人としていましたけれども、やはり改めて伺っていく中で、限界集落の問題と重

なると言いますか、限界集落の問題も自己決定のことを考えることなしには進めていけない問題だ、ということを感じます。

それでは、限界集落はどんなところなのかっていうことを考えながらちょっとその自己決定との関わりを見ていきたいと思えますけれども、限界集落ってという言葉はあんまりいい言葉ではないように、感じませんか。皆さんいかがでしょうか。なんか限界って、人から言われたくないよ、という、限界は自分で決めたいということがありますので、人から言われたくないよという思いもあるかと思えます。高齢化が極端に進んだ地域、ですよ。これは定義ではないです。後でまたきちんとご説明しますが、そういう高齢化が極端に進んだ地域というものに、皆さんどのようなイメージをお持ちでしょうか。

高齢化が進むっていうことを聞くだけで、元気がない地域なのかな、ちょっと暗い地域なのかなとか、それから、きっと不便な場所にあるだろう、ということですよ。やはり人口が減って行って、若い方がいない、ということで、高齢化が極端に進んでいるだろう。こういうイメージでいらっしゃると思います。いくつか当たっていてですね、おそらくいくつか当たっていないと思えますが、こういった様々な状況が合わさって、限界集落と呼ばれていくということで、何の限界かという、その集落を維持していくことができるかどうか、これの限界、ということです。

限界集落というのは、廃村という、つまりその集落が、人が暮らせる場所でなくなってしまう。そして、集落として成立しなくなってしまう。廃村ということの一步手前、限界にあり、一步踏み出せば、そこにもう廃村があるようなイメージです。

それを大野晃先生が定義して、限界集落という言葉が出来たわけです。65歳以上の高齢者が集落人口の50%を超える。そして、社会的共同生活の維持が、困難な状態である。様々な文献を見たときに、限界集落を、この前半の65歳以上の方が50%以上の集落ということで、見ているところもありますが、本当は後半の方が、限界という意味では重要だと思います。やはり、中々どこが困難なのかっていうところが説明しにくいこともありますので、特にこの高齢化率50%以上、65歳以上の人が2人に1人以上の割合です。

私は先ほど120歳まで生きますと、予定ですと申しあげましたけれども、皆さんは、今住んでいる場所にこれからどのくらい住んでいきたいと思っていらっしゃいますか。私は河口湖に120歳まで生きてもいいと思って、家を建てました。私は、與那嶺先生と違って計画的に家を買ったつもりです。35年ローンですね。皆さんご存じのローンです。計画してやりましたけれども、皆さんはどうですか。

今の場所に、今皆さんそれぞれお歳があると思えますが、例えば、120歳まで計算すると私はあと、85年くらいは河口湖に生きることになるわけです。まさか10年くらいしか先を見ていないということがあるかどうか、ちょっと分かりませんが、本当に皆さんが今住んでいる場所に将来ずっと住み続けられるかどうかというのを、地域包括ケアシステムでは問うているわけです。

皆さんが、例えば今住んでいる場所で30年経った時に、皆さん自身の変化もそうですし、その地域は30年経った時にどうなっているのでしょうか？もしかしたらもう皆さんが今住んでいる地域、今は限界集落ではないけれども、30年後に限界集落になっている可能性はないでしょうか。それを想定した中で、身体的に元気な状態でまずは思い浮かべてください。皆さんが高齢になっても、今住んでいる場所に住み続けたいと、住み続けるという自己決定ですね。出来るでしょうか。

昨日、タクシーの運転手の方教えて頂きました。長崎は、坂が多い。歳を取ると、上の方、山の

上の方に住んでいる方は、下山するというお話です。小さなコミュニティの変化かもしれませんが、近所の関係を絶って元々住んでいた場所、完全に絶つわけではないと思いますが、そこから離れて違う場所に居を構えるということが起きている。そういうことを、決定をしているということになります。これは、本人が「この場所では、暮らしていくのは難しい。暮らしていきにくい」ということを判断、決定をして、その自己決定の基に、住む場所を変えていくということをしていきます。

逆にそこに暮し続けるっていう決定も、出来たはずです。じゃあ、限界集落と呼ばれる場所は、どういうことが起きているかという、多くの人々が「ここでは暮らしていけない」ということを判断して、そこから離れて行ってしまった地域ではないかと思えます。一方で後でもまたちょっと出てきますが、「本当は暮らしたい」、「本当はこの地域が好きだ」、「美しい自然、場合によっては、温泉が素晴らしい」「仲間と愛着のある家」、そういうものに囲まれて、これからも住み続けたい。

しかし、先程、與那嶺先生のご講演に共同決定という話がありました。本人の意思に反して、離れて暮らしている家族は、段々年老いていく親のことを心配で心配でしょうがない。そうすると、何をするか。ここで暮らしては、親のためにならないと思うので、自分の家に連れて一緒に暮らしたい。親を説得するわけです。説得のプロセスの中で本人の強い思いに反して限界集落から離れていくということも起きます。

地域包括ケアシステムという、可能な限りそこに住み続けようとしても、やはり住み続けられなくなってしまうということが、そこで起きてくるわけです。本人が決定しても、実現できない可能性も出てきます。この可能な限りというのがどこに設定されるのかということが大変難しい問題になってくるかと思えます。

前段のお話と合わせてこの自己決定の問題も、地域包括ケアシステムっていうのは深く関係しているということをお伝えするために、ここでお話をさせて頂きました。ケアシステムと言いますので、どうしてもそのイメージ、環境を整える方のイメージを強くお持ちになると思いますけれども、環境だけではない、そこで暮らす本人が、その環境とどういう関係で生きているか、ここをきちんと考えていかなければ、本当の意味で地域包括ケアシステムというものを、このシステムというものの個と環境の関係性の中の問題を検討出来ないのではないかと、まず問題提起をさせて頂きたいと思えます。

3. 限界集落化して廃村になる理由

お話を進めていきたいと思えます。集落の維持が限界になっていくっていうこと理由は、高齢化が進んだからだとか受け取られやすいですが、本当にそれだけなのでしょうか。何でも歳のせいにする傾向が何かあるのではないかと思えます。確かに老化というものは不可逆的なものですので、私たちは避けられないわけですが、では村がなくなるのはそういうことによるものなのかというところ必ずしもそうではない。

高齢化によって失われたものは何なのか、高齢化ということでは例えば健康、これ維持するのは難しくなってくるのは当然です。会社を辞めれば地位を失って行って、そのことによる影響を受ける、喪失によっていろんな影響を受ける可能性があります。そして体力です。それだけのせいで村がなくなる、と考えてしまうと、この39.9%、2060年ですので、今から大体40、50年くらい先の話になりますが、この頃の日本に占める65歳以上の割合が日本全体で39.9%です。これは都市

部も入れてです。都市部はおそらくこんなに高齢化率が高くはならないと思います。

それを考えると、限られた自治体を除いて、限界集落化してくる可能性、非常に高いと思います。皆さん自身これから50年後ってどう考えられるかわかりませんが、私まだまだ現役のつもりです。ちょうど85、6ですので、まだまだ現役でやっている時代です。120歳まで生きると考えると、もう大問題なわけです。もう他人事ではないということです。この地域の衰退が、高齢化、65歳以上の人が増えるというだけを理由にしたとするならば、私たちの日本は将来どうになってしまうのか。日本の国全体が限界になるなんていうことは、当然ないと思います。避けなければいけないわけですが、あちらこちらで廃村が起きてくる可能性があります。

地域の衰退の理由は、高い高齢化率のほかに、働く場所がなくなること、日々の買い物、通院に事欠く。皆さん買い物に行きたいときには行けます。車を使う方もいらっしゃるかもしれませんが、歩いていける距離にある方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、うまくいかなくなってしまう。

田畑山林、こういうものを持っているところが多いですが、そういうものが管理できなくなる。そして冠婚葬祭。冠婚葬祭なにか関係しているのかと皆さん思われるかもしれませんが、元々は村の中でやっていたものなのです。今は村の中で、公民館で結婚式やるとかいうと、あまり見かけませんが、まずいませぬけれども、村の中でも支え合ってそういう冠婚葬祭をやっていくという、そういう文化というものはもうほとんど難しくなってしまうてきています。

そういう中で、待ち受けているのが廃村ということです。10年以内に消滅の可能性が高い集落が423集落あるといわれています。10年は、いつから数えて10年かといいますと、これ2007年の調査です。今、2014年です。3月になってしまいました。ということはもうこの423集落のうち、結構なくなっているというおそれもあるかと思えます。それに加えて、いずれ消滅する可能性のある集落、先ほど申し上げたように、これからある限られた自治体を除いては、おそらく、消えていってしまうだろう、限界集落化していこうといたったときに、既に2,643の集落がそのような可能性のあるものとして数えられています。

耕作放棄地が増える。耕せなくなってくる。高齢化しているということもここにあります。それから空き家です。先ほど申し上げたように、子どもに呼び寄せられて、その人たちが住んでいたところには、誰も住まない。貸し出しとかできればいいですが、できない。なぜかわかりますか。新たに人が住もうとしないからです、その地域に。もう新しく人が入ってこないで、空き家ばかりが増えます。

それから、「売りたいくない、好きだから、好きだから売りたいくない」、あとは税金の問題です。いろいろ理由はあるみたいですが、空き家が増えていく。そして森林は手入れがされずに、荒れ果て、ゴミの不法投棄の場になってしまいます。他にも、獣害、病虫害、私の知っているところではもう猪の害やハクビシンの害がひどいです。野菜を作っても作っても獣に食べられてしまうということです。そういう寂しい状況がありますけれども、そういった問題が発生していると言われています。

これらのことは、実は歳のせいというものもあるかもしれませんが、歳のせいだけではない。では何が失われているか。実は地域住民同士のつながり、こういうものをはじめとする、人と人のつながりっていうのがやっぱり失われているわけです。昔は、もうとっても豊かな人と人のつながりがあった。しかし、それが失われていることで、やはり廃村にどんどん近づいているかと思えます。

地域住民の生活を支えようという意識、貢献への意欲、これも失われているわけです。これは社会的なその価値観とかそういったものの背景もあるかもしれません。自分のことで精一杯、人のこ

とまでっていうところがなかなか難しいということがある。それから地域の課題の共有意識、どうですか皆さん自分自身とは直接関係ないけれども、ご近所の方がどうも介護が必要なようで、介護サービスが足りないみたいで家族がずいぶん大変らしい、という話を聞いたとします。自分の問題と関係あると思えますか。ちょっと離れた人の問題で知っている人のおうちです。そこまで情報がきているわけです。「ああ、あそこのおうち大変だな」と。「でもうちはまだ、年寄りがいないから、いいか」で、終わってしまう、可能性が高いと思います。

しかし、その地域でサービスを受けられないってところが、もしあるとするならば、もしご自身が歳をその地域でとったとき、何もその地域が変わらなければ、同じような問題を抱える可能性があるわけです。ご家族をもし呼びよせたならば、そういうことも起きる可能性があるわけです。

実は他人事ではない、けれども、他人事にしか見えない。そういう現状がまだまだあるということです。これを地域の課題の共有意識と呼びます。これはもともと皆さん、近所の人ことはもう見て見ぬふりはできないという状況があったと思いますけれども、なかなか、そういう状況ではなくなってきている。これは地域住民の人のつながりが失われているということで、地域の人同士のパワーです、こういうものも失われてきているということがいえます。

4. 地域住民のパワーの構成要素

私はこの地域住民のパワーを研究しています。よく地域の福祉力っていう言葉を聞いたことがあるのではないかと思います。地域力とか、地域の福祉力という言葉で、社会福祉協議会の人達、地域包括支援センターの方、今日もいらしているでしょうか。地域のそういったものを高めるアプローチをしていかなければいけないということを言われているかと思いますし、そういうアプローチを一生懸命されていると思います。

しかし、今までの議論の中でその地域力や地域の福祉力がなんなのか、ということが明確にされてこなかった経緯があると思います。地域の力を高めようとしているけれども、一体何を高めたのかよくわからない、ということが続く、というようなことがあったかと思えます。私の研究では、この地域住民のパワーを測定する取り組みを行っています。

測定するからには何を測っているのかということをしてできるだけ明確にしなければいけないわけです。地域住民のパワーというものは二つの構成要素から成立していると考えて、測定を行いました。地域住民のパワーを地域の生活問題に向き合い、主体的に問題解決しようとする、地域住民の力、と定義をしているわけですが、一つは地域の福祉への影響力意識、例えば、質問項目としてはですね、自分の力は地域をよりよくするのに役に立つと思えるかどうかです。思えると言うことであれば、やはりパワーが強い、これを影響力意識と呼んでいます。

それから、二つ目に地域の福祉課題の共有意識です。これは先ほど、少しお話したものと同じですけれども、同じ地域に住んでいる人の問題は、自分の問題でもあると思う。こういうような質問項目をいくつか作って測定を行っています。そう思えば、地域住民として、地域住民のパワーは強いと考えられると思います。

5. 地域包括ケアシステムの五つの構成要素

地域の問題解決をしよう、と考えた時に、「自分の問題じゃないのになあ」と思いながらやるわけ

にはいかない。何か自分とこの問題が関係していると、そしてこのつながりを感じながら、なんとかこれしなくてはいけないと思えるということが必要になってきます。

そこで、今日のテーマでもあります、地域包括ケアシステムです。今日のテーマは構成要素の話になっていて、地域包括ケアシステム五つの構成要素が地域包括ケア研究会の報告書であげられています。先ほど申し上げたような限界集落に対してこういうものがどう関係しているのか、構成要素がどのようになっているかっていうこともこれから見ていきたいと思えます。それから、「自助」、「互助」、「共助」、「公助」、これらは最近、特に災害のところでもこれらの言葉が聞かれていますけれども、このことについて、今まで見てきた限界集落とあわせて見ていきたいと思えます。

パワーの話とちょっと一転していますが、限界集落の現状をちょっとお伝えしていくと、まず、住まいと住まい方。これは、その人がそのときに、その経済状況に合わせて住まいを選んでいけるということが理想ですが、限界集落の中には住まいと住まい方の選択肢はありません。自分の家か、よそに出るか、この二つです。

それから、専門的な福祉サービスの提供者が少ない。ホームヘルプの事業所を一つおいとけばいいのではないかとされますが、採算がとれずおいてくれるところがない。おいてくれるところがないのでどうしているかという、ヘルパーさんが20分とか30分かけて来る。もしかしたら離島とかの場合には、もっと難しい状況があるかもしれません。ヘルパーさんが来てくれなければ生きていけないというケースがあります。本当に命に関わる問題なわけですが、提供者は少ない。

その採算がとれない理由は何かという、実は、介護の必要な住民はあまりいないのです。ちょっと皆さんのイメージとずれていますよね。65歳以上の人ばかりの地域で、極端に高齢化していて身体的に衰えてきていて、というイメージなのに、介護の必要な住民はあまりいない。この地域で介護が必要になったら、暮らしていけないわけです。じゃあこの地域に残るかという、残れないということで、ここでもういなくなってしまう、という現状もあります。全くいないわけではありません。全くいないわけではありませんけれども、そういう状況になっている。福祉サービスという意味では、難しい状況にあります。

それから、介護、医療、予防の専門職の不在の問題です。医療とか予防とか相談という意味でもそうですが、集落が元々の一つの村であれば、保健師さんが一人いたかもしれません。村に、配置された保健師さん、もしくは社会福祉士がいたかもしれません。けれども、合併をしてしまうと、村にあった村役場は一つの市の支所になってしまうわけです。その支所に置かれるのは、書類の手続きですとか、ある程度限られた機能しか残せないわけです。じゃ、もともといた保健師さんはどこに行くかと言うと、中央の市役所の方にお勤めになる。市役所、けっこう遠いです。合併したけれど、地域でも、地域みんなのことをきちんと理解していた保健師さんや社会福祉士がその地域から離れていってしまう。誰もそれをケア出来なくなってしまうということが起きてしまう。

それから、次に、「自助」「互助」は、「共助」「公助」を代替しない、出来ないということです。さきほど皆さんに見ていただいた地域包括ケアシステムのスライドの中に、「共助」「公助」を拡大して行くにはお金がない、急激には出来ないということが書いてある。だから、「自助」「互助」を高めましょうっていう事が書いてあります。しかし、もともと機能が違います。ホームヘルパーさんとしてしっかりトレーニングを積んだ方と、近所の中でちょっとお手伝いをして見守りをしてというレベル、これは全然意味が違います。代替する事はできない、「自助」「互助」が果たす役割には限界があります。

そして、高齢化による手段的サポート提供の限界化の問題があります。この手段的サポートというのは、具体的に例えば電球が切れて、本人電球変えることできないので、電球変えてあげましょうということも含まれますし、大雨が降った、雨樋が壊れた、じゃそれを直してあげましょう。それが当たり前だった地域ですけれども、高齢化によって出来なくなりました。それは何かと言うと、助けられる人、助ける人、お互いに高齢化しているので、元々出来ていたことができなくなってしまっているわけです。高齢化によって、情緒的な、例えばお茶のみをしてお話をするということは、結構長く出来るんですけども、具体的なお手伝いとなると、難しくなってしまうという現状があります。

最後に、プライバシーの保護と「互助」、近隣住民の声掛けや見守りの推進が矛盾しているという現状です。難しいです。これは世の中の価値観とかそういったものとの関係の中でとっても難しい問題ですが、プライバシーを保護するということは、つまり地域の人から見えなくする部分というのはかなりあります。つまり、見られないようにする。見られたくないものは当然見られないようにするのですが、実はそれが「互助」をやっている、見守りをしているという時に逆に上手くいかない理由になってしまっている、ということが起きています。そういう事をちょっと具体的にアンケート調査の結果からきちんとご説明をしていきたいと思っています。一つの私の研究のフィールドにしている所を例にしながら、限界集落の現状とそういった所が限界集落化するとどうということが起こるのかを、共有していければと思います。

6. 限界集落調査

(1) 地域の概要

調査の対象地域ですが、ある旧村です。今はもう合併して市になっています。私はその旧村の4集落をフィールドに調査をしています。本当に歴史の古い地域です。同じ大学の歴史の先生に頼まれてまして、その地域からもしかしたら襖とかに古文書とかが入っているものがあるので気をつけてほしいということでした。昔の人は価値がよくわからなくて襖に貼ってしまったりするらしいです。それを見つけたらすぐに連絡くださいと言われるくらい歴史のある地域です。足利家の落ち武者伝説があります。中山間地域に位置していて、高齢化率が57%です。50%と57%は実は結構違います。高い率だと思います。合併によって市の一部になって、産業は炭焼き、農業、昔は養蚕をやっていたということですけども、実はもともと、周りの地域からは離れた場所にありましたので、経済的には貧しい地域であったとうかがっています。炭を焼いてはもっていったものと交換して帰ってくるという生活をしていた地域だそうです。

四つの集落から構成されていて、一つの川に沿って集落があります。一つの川に沿っているとなると、高いところから低い所に流れていくということになります。低い所では水温がある程度維持できるので、米が作れますが、上の方の集落は寒すぎて米がとれない地域でした。やはり貧しい思いをして、生活をしてきたということです。現在、空き家がかなり目立つ状況があります。

(2) 人口推移

実際にどの様に人口が推移していったかちょっとみていただきたいと思っています。昭和60年は843人いました。現在平成25年の統計で438人。半分です。国勢調査なのできっとそこにいるのだと思いますが、私が地域の中を全戸訪問してアンケートをしても、こんなに人数は出てきません。住民基本

台帳は使えないです。もう、出て行っても住民基本台帳に反映させないので、空き家のままでそこにいるはずなのに、もう違う場所に住んでいるという方がたくさんいます。

それから、子供の数、平成25年の保育園児は一人です。僻地保育園ですが、一人に保育士3人です。先日お邪魔したのですが、「園児が3人になりました」って、喜んでおっしゃっていました。小学生が12人。平成8年度から山村親子留学制度が導入されています。中学生です。平成22年から統計がなくて、25年は括弧書きです。これはどのような意味か、皆さん考えてみてください。中学校が無くなったのです。この中学校が無くなるというのは実は非常に大きなことです。隣の中学校までかなり距離があります。その中学生の親たちがわざわざそのバスにのせていくような場所に住み続けるかどうか。やはり大変だなと思えばそっちの方に引っ越すってということがわかりやすい行動だと思います。それも、自己決定されていくわけですけれども、12人の中学生はいるということです。

この地域について私は2008年度から、2012年度まで、合わせて3回の調査を縦断的に行いました。全部で最初の調査から最後の調査までで4年しか違いませんので、そんなに地域の変化が大きく見えるかという問題はあります。

この4年間の間に、農産物直売所がつくられたり、近隣の町との間のトンネルが開通したりと、この地域に大きなことがありました。

地域住民のパワーもそうですが、やはり地域包括ケアシステムの構成要素としてその地域住民のパワーといったときに、「地域の人ほどのくらいお互いに支え合っているのだろうか」とか、見守りということがすごく大事だと言われる時代に、「見守りはこの地域でどのくらい行われているのだろうか」ということを見ながら、進めていきたいと思います。

(3) 対象と方法

調査対象の4集落にある全てのお家を訪問して、お家にいる20歳以上の方の人数を伺って、調査票を置いてくる。そして答えていただいたものを回収する、という作業を使って行いました。お家があるということは、一軒一軒お名前が入っています。そのような地図がありますので、その地図をもとに、お名前が入っているところは全て訪問しました。しかし、お名前が入っていてもいらっしやらないお家、何度訪問しても常に空き家というお家がかなりありました。調査を実施したのが、2月の末から3月で、この地域は大変寒い地域ですが、農繁期でない時期を狙って調査を行っています。そのように横断調査を繰り返し実施して、3回行ったところです。

(4) 回収結果と回答者の属性

20歳以上の方対象にしています。2008年は268件配布しています。そこに一応いらっしやるということを確認しています。けれども、175件が回収され、65%です。次の回、2010年が230件配布、81%回収。2012年度、13年の3月ですが、228件配って186件回収がありました。属性に大きな変化はありません。男女比それから年齢についても、有意な差はないということになっています。

皆さんここに注目していただきたいです。この集落でアンケートに答えていただいた方の約半数、義務教育までとなっています。これは高齢になればなるほど、その傾向が強い。なぜかという、実はやはり、昔から周りの集落と離れていたのも、高校に行くためには一人暮らしをしなくては行けない地域です。今は送り迎えしている方もいらっしやるみたいです。車がありますので。昔の方

は、実は小学校中学校まで、という方がかなり多い。80代・90代の方には、文字が読めないという方が、いらっしゃるということがわかっています。訪問して、アンケートをお預けするのではなくて、そこで聞いて、調査をするケースもあります。これは何かというとやはり、昔から学校に通う、教育を受ける、という意味で、社会的に排除されてきた地域だったということがいえるのではないかと思います。

7. 限界集落調査結果

(1) 地域の集まりへの参加の変化

次から地域の参加と支え合いのデータを見ていきたいと思います。町内会の会合です。皆さんこの数字どう見ますか。町内会の会合に出ていますという方が6割弱、皆さんの地域で町内会の会合に出ている人は、どのくらいの割合でいますか。6割も出てくれる。こんなに出ていません。この地域は衰退していく、と言っても地域のつながりや、地域の人がこういう会に参加して、何とかやっていこうというのが、まだまだ強く残っている地域です。

それからこちらです。地域の葬式に参加していますか。これは、友人の葬式に参加していますか、この地域においては近い意味だと思いますが、地域であるお葬式には約8割弱の人が参加をする。近所でお葬式が出ても、関係ないって時代が今なわけですけれども、この地域はもう8割ぐらいの方が、皆さんで支え合いながらお葬式を執り行っています。この地域で亡くなるということは、なかなか難しい状況があります。町内清掃はどうでしょうか。支え合いで大変重要な役割だと思いますけれども、やはり7割～8割弱程度、町内の清掃に参加してくれる。すばらしいですね。いい地域で、私も大好きです。

地域の集まりの参加、神社のお祭り、こういうものがどんどん失われている昨今なわけですが、こちらの集落では7割弱がお祭りに参加しています。4つの集落があると申し上げましたが、それぞれの集落にお寺と神社がやっぱりあります。古くからそれをお祀りして、一生懸命それを維持していったわけです。そういうものに多くの方がまだ参加している。ただ、やはりかなり高齢の方のご参加ということになります。

これがまた一つ気になるデータです。老人クラブというのは、高齢の方がお互いに支え合う互助の会、お楽しみです。2009年の調査では、それに参加している人は7割程度いらっしゃいました。それが、この2年たった2013年では、6割弱に減ってしまっている。ここで1割の変化というのは意外と大きいと思います。実際に地域の方にも聞いてみると、老人クラブの活動が難しくなっているという話もあれば、変化を実感していないというお話をきくこともあります。それでも組織率としては高いと思います。この数字は60歳以上の方を再計算しています。

地域の集まりへの参加の変化です。これは、村民運動会です。だいたい町民の人の6割ぐらいが参加しています。衰退するどころではなく、13年のところでは67%に上がってきている。これは何もせずにこうなるわけではありません。これは、都会から人を呼びました。自然の美しい空気のおいしいところなので、是非東京の皆さん、運動会を一緒にやりましょうという企画をやって、町民の方も参加が増えたわけです。この回答は、東京の方は回答していません。何かそういうアプローチをすると、地域の方がこのように応えてくれる。これは、東京から来た人をきちんともてなそうと、みんなで出ようよ、という声かけがあったと思います。それで7割もの人が参加をしてくれた運動会になったということです。

それから、防災訓練。皆さんの地域の防災訓練の参加率はどうですか。この地域は8割が参加しています。この地域の歴史として、防災を大事にする歴史があります。これは地域のことを理解していくのに大変重要な視点だと思います。先ほど申し上げたように、川沿いにある集落です。川沿いにある集落で、大雨が降ると、土石流が流れるわけですね。多くの住民のそのお家が流されて、多くの死者がこの地域でたという災害がありました。そのときの教訓をいかして、実は防災訓練にはみんな必ず出るようになっていきます。逆に地域の方はこの2割も出てないということに驚いていました。

防災訓練もそうですが、「地域の集まりに都合があって出られない」、よく言う言葉です。その都合ってというのは、親の葬式以外にはないというような地域なのです。これは、限界集落でのそういう価値観の中に、新しい人が暮らせない、ということを表しているかもしれません。一つの理由かと思えます。

実はこの2011年3月9日まで調査を実施しておりました。その3月11日に大きな地震、震災がありました。直前まで調査をしていてデータをとった上での状況ですが、次の調査ではやはり、防災訓練の参加者数が、パーセンテージが少しですが、これは統計的に有意ではありませんので特別な意味はないかもしれませんが、参加者の率が少し上がっています。減るばかりのところでは少し増加しているわけですから、やはり、影響があったと思います。よく町内会の防災力が発揮されることを、私達は期待するわけですが、普段何にも無いときから「力を発揮してください」と言っても、「あれ、何のために集まるのだろうか」という疑問を持ったまま集まっている方が多いように思います。しかし、やはりそういった防災とか、自分達のことを皆で一緒に力を合わせて守ろうというような、そういうモチベーションがあったときに、このような集まりがしっかりできるという、そういうものになっています。

それから、無尽というものがあります。皆さんは、無尽という言葉をはじめて聞いていらっしゃるかもしれません。地域の中の仲良しチームの互助会みたいなものです。無尽という集まりを作ります。無尽会と言ったりもします。貯金会とも言われています。集まって宴会をします。同級生だとか職場の仲間だとか、そういう集まり、インフォーマルな集まりをします。お互いに助け合う会です。

宴会をしたその会費とは別にお金を貯金します。貯金をどんどんしていきます。宴会のたびに貯金されていく、貯まっていきます。任意団体ですのでちょっと、会計上どうなるかという問題もありますけれども、それが貯まってきたところで、例えば、その年車検がある人います。それでは、「はいどうぞ」とそれがその車検の人にそのお金を渡されます。そういうシステムで運営されているお集まりのようです。これが無尽会と言います。

これはある研究では、この無尽会が健康にすごく良い効果を与えているという研究成果が示されています。この地域では、それに参加している人がだいたい2割から2割弱になってきています。お金の問題で、トラブルもあります。調査で無尽の話をしたときに、あまりいい顔する人は多くはありませんでした。無尽に頼って健康作りで無尽をやろうというのはちょっと違うのかなと思っています。昔は本当にこれが機能していたと思います。今は機能しなくなっているのではないかと考えています。

次に、近所の人同士のお茶飲み会。こういうのは地域包括支援センターの職員としてはどんどんやってほしいところですよ。この地域は5割の人が近所の人とお茶を飲んでいる。こんなにすば

らしい地域はないと、繰り返しになりますが、思います。5割から5割弱の方が、地域の人とお茶を飲む。最近、この地域に行ったとき、93歳のおばあちゃんがもうゆっくりゆっくり坂を登りながら「これからお茶飲み会に行く」とお話されていました。やはりそれが楽しみでもあるし、地域の人同士をつないでいる、という会でもあります。しかし、これもやはり移動の問題が出てきています。減ってきていると思います。坂の多い地域ですので、「もう、坂が登れない」、「坂が下れない」という高齢の方が増えてきています。

このお茶飲み会の話題を離れるんですが、バス停がメインストリートにあります。本数は少ないのですが、バスが来ます。どこかに行くときには、車を持たない高齢の方にとって必要ですが、「もう、バス停まで降りていけない」という声が聞こえています。玄関から出て、目の前の坂を下れない、上れないっていう人が、増加してきているのが現状です。

ソーシャルサポート提供の変化です。「一人暮らしの高齢者宅に定期的な訪問をして話しを聞いたことがありますか」、っていうことでこれは、なんと4割ぐらいの人たちが近所の人の所に行って、茶飲み会とかなり近い機能なのかな、と思いますが、話しをしているということです。地域包括支援センターではこういう地域を作りたいですね。皆さんがお互いに支え合っているというイメージだと思います。

(2) ソーシャルサポート提供の変化

それから、ソーシャルサポート提供の変化で、一人暮らし高齢者への定期的な電話をかけるかどうかについてです。この地域では、3割程度の人がそういうやりとりを地域の人としている。これはそんなに変化していません。

お食事会。これも手段的なサポートにはいって来ると思います。食事をとるっていうことを、生活の中で誰もが必要としているわけです。これは食事をとるためというより、人と繋がるということだと思います。1割ぐらいの方が参加している。

それから配食サービスです。これも1割弱の方が参加しているっていう感じでしょうかね。2011年のデータは、ちょっと違う値を示しています。次に「定期的な声かけ」ですね。定期的な声かけをやはり5割ぐらいの方がそっとしている。気になるお家、ありますよね。「おばあちゃんどうしているかな」、「今日の朝も元気で起きているかな」と。ある地域では、「元気で起きたらハンカチ出しておいてね」や「洗濯物が毎日出ているはずだけど今日は出ないな」とかそういうやりとりがあるかと思います。定期的な声かけというの、けっこう積極的にやっていると言っているのではないのでしょうか。そして、様子を見守り、見守り活動、こちらも3割ぐらいの方が地域では行っています。

「買い物の付き添い」。この質問項目を立てたとき、「本当に買い物の付き添いって行ってくれるのだろうか」と思いました。これはサービスで付き添うということではありません。近所の方が車を出して、高齢の方を車に乗せてあげて、一緒に買い物に出かけるということをしてきています。車で近所のスーパーまで20分から30分ぐらいかけて出かけていくときに一緒に乗せていくということです。地域の15%ほどの人が付添をしているということです。

この地域の中にスーパーマーケットのようなお店はありません。農産物直売所はできましたが、スーパーはありません。若い方の悲願は、この地域にコンビニを作ることです。それだけではやはり生活に困りますので、移動販売車がこの集落に週に2回来るということになっています。そこに

も降りて来られない方が増えてきています。そこでの買い物の付き添いが必要であるということと、それから移動販売車の方はやはり地域の方をよく知っています。お家の玄関まで付け届け、お金はその時頂かないようですけれども、もう置いておいて付けておくという形で、後でまとめてお金をもらうというようなやり取りがまだ行われているようです。

そしてこれは本当に大事ですよ、通院の付き添いです。これは、有償の福祉サービスの移動、福祉移送みたいなことっていうのを、私たちはすぐイメージしてしまっていますが、そういうこととは全く関係ありません。近所の方が「私、病院行くけれど乗っていく？」という声かけをして通院に付き添うのです。だいたい2割ぐらいの方が、付添をやっている。もしかしたら家族ということもあるかもしれませんが、この地域では、家族外にも行われているということがヒアリングなどで分かっています。私がお邪魔した時にも、みんなで車に乗りあって、1台に4人ぐらい乗っていて、「これからみんなで病院に行く」、「買い物に行く」なども聞かれるような状況です。

次に、相談の付き添いです。相談に付き添ってくれることもあるということです。

(3) 地域住民のパワーの変化

2009年から2013年までで、先ほどお話した地域住民のパワーに変化があったのか、4年間ですからそれほど大きな変化は見込めませんが、この2011年、データがどうなのかなとも思いますけれども、少し下がっているように見えます。上のところが43.8点、下のところが42.4点で、1点ちょっとしか変わらない。

この結果からは、地域住民のパワーは、この地域は横ばいということと理解していただきたいと思います。1年や2年で急激に落ちたりはしないだろうと思います。それから、この地域この4年間の間でいろいろなことがありました。先ほどお話した、農産物直売所ができたり、トンネルができたりということも起きています。その中でも大きく変わらなかったということです。

地域住民のパワーの構成要素別にみていくと、影響力意識、つまり、自分の力はこの地域を良くするのに役に立つと思えているかどうかの得点は、2009年は24.25点、2011年は23.25点で、やはり1点の範囲内です。横ばいというふうに判断しております。

それから、地域の福祉課題の共有意識です。2009年は19.4点、2011年は19.1点、その差0.3点ということで、完全に横ばいということです。

少しやはり気になるのは、それぞれ少しずつ下がってきているのは確かであるという点です。次に来る3月にも調査を予定しています。それが今度6年目になります。予算も取ってありますので、しっかり調査を実施した時にこれがまた横ばいなのか、それとも、1回目の調査から比べるとけっこう下がった値になるのかは少し注目をしていきたいと思います。年齢構成もまた6年間経つと65歳だった人が70歳を超えますので、けっこう大きな変化かなと思っています。

(4) ひとり暮らし時の永住希望の変化

先ほどみなさんに問いかけた、一人暮らしになったときに限定をしていますけれども、この限界集落と呼ばれる地域で暮らすということで考えて、みなさんが一人暮らしになったときにこの地域に暮らし続けたいかですが、8割ぐらいの方がやはり暮らし続けたいと回答しています。これは身体的に元気な状態のときのことを言っています。この地域の特徴かと思いますが、この地域で一人暮らし続けたいけれども、本当にこの地域が好きで暮らし続けたいと思ってもらえる。

この問いに対して、「地域包括ケアシステムがあるから大丈夫だよ」「地域包括ケアシステムが構築されているのだから、可能な限りこの地域で暮らしていけるよ」ということをお伝えしたいところなのですが、これが「介護が必要になったら」、ということだと聞くと、25%ぐらいの方が、「もうこの地域に暮らせない」となります。

「介護」ではなくて「他人の世話が必要になったとき」という聞き方をしているわけですが、25%の方が、一人暮らしで身体的に、生活上支援が必要になった場合には、他の市町村にいる家族の家などに移りたいとなってしまうという、つまり、「ここには人の世話が必要になったときには、もう住めない」ということを多くの方が自覚している状態ということになります。インタビューをしていると痛いほど分かりますが、本当にこの地域の人たちはこの地域のことが好きです。地域の良いところばかり出てきます。しかし、雰囲気が変わるとすぐネガティブな話になってしまいます。強い愛着を持っていても、こういうことが起きるとということが本当に寂しいなと思います。つまり本人たちはここに暮らし続けたい、けれどもそれを許さない環境があるという状況です。

(5) 「農産物直売所」と地域住民のエンパワメント

同じ調査ですが、統計的なデータを見ていきたいと思います。農産物直売所ができました。これは地域にとっては大きなものだと思います。外から人が来ると言っても、ヤマメ釣りに来るという程度です。あとハイキングです。そこに農産物直売所ができた。それまで住民同士が野菜と野菜を交換していたものが、今度は売り場に出されるようになりました。2011年と2013年、農産物直売所との関わり方を、「買い物をするという関係」、「食事をしにいくっていうこと」、産物直売所は住民の共同出資でやっているの、お金を出している方は、「出資しているという関わり」、それから、直売所なので、「出品をしているという形の参加」、この4つについて、先ほどみなさんに見ていただいたパワーとの関係で見えてきました。

「買い物」、「食事の利用」が、年を経るごとに増えてきています。つまり、農産物直売所ってというのは観光客が来て買い物していくイメージだと皆さん思いますが、このアンケートは住民に対して行っていますので、住民がこの農産物直売所で買い物をしたり、食事をしたりするということが増えてきているということになります。2011年より2013年で増えてきています。

運営に参加するということを出資、出品っていう意味では変わりがないですね。先ほど地域住民のパワーを測定しましたが、「買い物や食事をしているかいなか」や、「運営に参加しているかいなか」でそれぞれパワーの違いをみたところ、食事や買い物では使っていないなくても、地域住民のパワーには違いがありませんでした。一方で、「この直売所を運営するのに参加しているよ」という人の地域住民のパワーの得点は、参加していない人に比べて有意に高いという結果が出ています。

この地域には力を持っている人はたぶんたくさんいたのだと思います。けれどもその人たちが力を発揮する機会がそんなになかった。それが、この農産物直売所ができたことによって、そして、ここに参加するということによって、力を発揮する機会を得たのではないかと思います。農産物直売所を中心にパワーを持った人たちが集まって、そのパワーを発揮する機会を得た、そういう場になったのではないかと思います。そして、そのような場所が、買い物にも使ってもらえる、食事にも使ってもらえる、そのような役割を果たしているのではないかと感じています。

(6) 「トンネル」と地域

次に、トンネルです。トンネルが通るということは、限界集落において画期的なできごとで、悲願でした。トンネルが通れば、買い物にも便利です。車でという話です。それで、「実際どのように使っていますか」という自由記述のデータを得ました。

これは主観的な分析ですけれども、テキストマイニングの手法を用いて、共起ネットワークを作成しました。やはりこのトンネルは、買い物に使われているようです。買い物に使うと便利である、ということが一番にやはり出てきていますね。トンネルとのつながりで買い物、そして、世界遺産になったところのそばに集落があるのですが、トンネルによってつながりました。そちらの方にもよく出かけられるようになりました。つまり、生活圏も広がってきている、ということです。買い物も、外食をするレストランにもよく出かけるようになったなどの生活の広がりが、そのトンネルを通して得られています。

ただし、これは車を持っている人に限られます。トンネルが通ったことによってバスが、2時間に2本のルートとはまた別にできたので、それを使える人は買い物や食事に、便利に使えるようになりました。

しかし、心配なこととしては、そこを通り道に使う人が増えてきたので、集落のおじいちゃん、おばあちゃんたちが、ゆっくりゆっくり歩いて暮らしているところに、車がびゅんびゅんと走るようになった。これはちょっと心配だ、ということです。車が多くなったということがよく聞かれます。

災害対策はかなり期待されている部分ではありますが、こういうことも考えないといけないのかと思われたのが、最近の大雪でのことです。大雪によって、集落のある県全体が陸の孤島になりました。トンネルによってつながった町の中にもかなり雪が深くなって孤立した集落があり、多くの方が孤立して、食料も何日も手に入らないという状況がありました。当然、調査の対象地域の集落も完全に雪に閉ざされました。その時にきっとトンネルが役に立つと、そういうときこそこのトンネルだと思います。私も思いました。この時トンネルは役に立ったのかというと、実は役に立たなかった。何故かと申しますと、トンネルの一方はその限界集落で、これはある市ですが、もう一方は隣の町です。行政が違うのです。

隣の町にとっての優先順位は、そのトンネルを通れるようにすることではなく、実は「急いで雪をかかないといけない」、「孤立を解消して人を助けないといけない」、「やらなきゃいけない」という所は、別の場所にありました。大雪の結果通れなくなったこのトンネルを、急いで雪かきをするということが出来ませんでした。ここで事例にしている限界集落側は通ったとしても、結局出口の方の雪は長い間片づけられない。結局、この道を通っているルートというのは、長い間通せなかったというのが、結果です。

もし、同じ市内にある入口と出口であれば、急いで雪を片づけたのではないかと思います。しかし、やはり縦割りの行政の連携の中では、皆が余力のない中では、トンネルの開通は優先されなかったわけです。隣の役場の関係者に「限界集落の方のトンネルの状況はどうですか?」と聞きました。返事は、「全然確認してない、見てない」ということでした。やっぱり隣の市で起きていることっていうことになってしまうということを強く実感しました。このトンネルは災害のこともあって、通したトンネルだったはずですが、災害の時にもこういうルートをきちんと作っておこうと作ったはずのトンネルだったのですが、今回のケースでは機能しなかったという問題が見えました。

(7) 地域住民のエンパワメントによって何が得られるか

次に「地域住民のエンパワメントによって何が得られるか」という問題を投げてみたいと思います。今までの調査の結果をまとめていきたいと思います。先程、永住希望について2つの種類の質問がありました。一つは、「健康な時、自立している時にこの地域に住み続けたいですか?」という質問、もう一つは、「人の世話が、他人の世話が必要になった時に、住み続けたいですか?」という質問でした。両方ともこの地域住民としてのパワーが高い方は、住み続けたいと答えています。「地域に対して自分の力は役に立つ、地域の問題は自分の問題だ」と思っているという人たちは、この地域で暮らし続けたい。世話が必要になっても暮らし続けたいと言っている人が多いです。

このことから、地域住民のエンパワメントによって何が得られたかの一つは、この地域に暮らし続けるっていうことを決定してくれる可能性を高められるということです。不便で、危険もあるかもしれないけれども、この地域に暮らし続ける。急いで病院にかからなくてはいけないときにも少し時間がかかるから助からない可能性が高くなるかもしれない。それでも、この地域に住み続けたい。安全性にリスクがあっても、暮らし続けたいという思いを作っていくことにつながった可能性があります。

地域包括ケアシステム構築への参加、貢献意識を高めるということでもあります。色んなものに参加をしている人は、やはり力が強かった。先程の農産物直売所の例もそうです。参加している人のパワーは高い。例えば地域の問題解決に向けたアイデアを検討するとか、認知症サポーター養成講座への参加とか、介護講座を受講するとか、そういうことに力を発揮する人が力の高い方だと思います。

それでも、「自助」「互助」が「共助」「公助」とは、同じにはならないという点に、留意が必要です。「自助」「互助」を担う方が、ケアのプロフェッショナルになっていけば、話は変わってきます。そういう意味で、住民のトレーニングを本気でやっていくっていうようなことをするのであれば話は変わってきます。しかし、中々そういうことは出来ません。難しい現状があります。極端なこと言えば、教育改革があって「介護技術」が中学校等で必修になるとか、そんなムーブメントが起きた時にはもしかしたら変わってくるのかもしれませんが。しかし、今は「互助」という中ではプロの技術とか、よりよい技術が提供されない状況があります。

(8) 地域住民のパワーは「可能な限り住み慣れた地域での生活を継続」を実現したか

それから、地域の問題解決のアイデアを出すだけではありません。実際に参加していくという人が、やはりパワーを高めていくと増えてくるだろうと思います。ただし、これは「自助」「互助」のレベルです。「共助」「公助」という意味で提供されるサービスとは、イコールではありません。解決できる問題も同じ問題ではないとしっかり理解をして頂きたいと思います。見守り、声掛け、お茶飲み会、いくつかの統計表をお見せしましたが、そのようなものが住民相互に実施出来ます。

今回焦点を当ててお話をさせていただいているのは、地域住民のエンパワメントは、地域包括ケアシステムの構築によって目指している「可能な限り住み慣れた地域での生活継続」を実現するのに貢献したのかどうか、ということです。先ほど見てきた地域は限界集落と言われている地域ですが、もしかしたら皆さん暮らしていらっしゃる地域よりも、地域住民のパワーは高かったのではないかと思います。人と人のつながりや地域の行事に参加することなど、いかがでしょうか。皆さんの暮らしている地域と比べてみてください。例えば、私が暮らしている地域よりも高いです。しか

しどうでしょうか、この地域に可能な限り住み続けたいと言えるでしょうか。

この地域の子育て中の親は、実は子どもに言っています。子どもは、大学や高校への進学で集落の外に出て行きます。出て行った子どもたちに、この地域には帰ってきてはいけない、と言っています。私たちが出かけて行って、集落の中でお話を聞くと、「若い人たちに来てほしいね」「住んでほしいね」とおっしゃられます。

しかし、自分の子どもには「帰ってきてはいけない」「この地域には帰ってきてはいけない」と伝え、そして、近隣の便利なところ、中核都市と言われるようなところですが、「もっと便のいいところに家を建てなさい」と言うのです。この限界集落に住んでいる親が、外に出て行く子どもに、「集落の外に建てなさい」と言うだけではなく、場合によってはお金も出してくれるそうです。そして、親に言われた通り、子どもはその集落の外に家を建てます。愛着がないわけではありません。お盆や行事の時期、お正月には車がたくさん並びます。家の駐車場、車庫に入らないので、道路に並んでいます、外から人が来ていることがよくわかります。愛着をみんな持っている、しかし、この地域には住めないで「外に住みなさい」と言い、外に住ませた子どもに呼びよせられていくという結果が起きています。

これは何かというと、介護が必要になったら、集落の外の親戚や施設に行くしかもうない、ということ。介護サービスもない、暮らし続けられない、暮らし続けられるという見通しが立てられない地域になっています。地域住民のパワーは強い、つながりも強い、支え合い見守りも行われている、しかし、それだけではこの地域で暮らし続けるっていうことはできないということです。

医療は診療所が週に1回木曜日の午後、開いている。それに合わせてバスが出ているのですが、そのバスにも乗れないという高齢者がでています。医療の面でも、ここは暮らし続けられない地域になってしまっている。つまり、地域住民のパワーを高めるということだけでは、地域包括ケアシステムを作るということは、できないということです。地域住民のパワーを高めていくことは大変重要なことです。地域包括ケアシステムを、環境とその本人との関係との中で見ていくときに、地域住民のパワーを高めていくことが大切だということは明らかですが、それだけでは地域包括ケアシステムは構築できない、ということです。

結果的に介護が必要になった人や高齢者は、この地域での生活から排除されていく、ということが起きています。行政は地域住民のパワーが大切だ、と言います。しかし、実は地域住民のパワーを維持したり、高めたりするためのコストはかけていない。「それは自分たちでやってください、地域のことですから」となります。データをもとに「地域包括支援センターの職員を是非おいてください。一人、この地域の支所に専門職を配置してください」とお願いしても、コストがかけられないので置きません。この地域は旧村ですので、もともと社会福祉協議会がありましたが「常駐の職員を置いてください」とお願いしても社協も対応できません。この状況の中で、見方を変えれば、「このようにして」人が排除されているということです。

(9) 地域包括ケアシステムの構成要素としての地域住民のパワー

地域包括ケアシステムの構成要素としての地域住民のパワーの役割の一つは、「可能な限り、住み慣れた地域で生活を継続することができる、もしくはしたくなるような地域住民の動機づけ」です。地域住民のパワーを高めることは、「ここは本当にみんなとのつながりが大事だから、暮らし続けたい」と思えるような動機付けにはなっているだろう。構成要素としても、この意味で大変重要です。

どれほど環境が整っていても、その地域が好きでなければ、「こんな地域ではなくもっと違う地域に行きたい」という人が多ければ、これは住み続けることにつながりません。

次に、地域住民のパワーが高ければ、地域の強みや地域の持ちうるものを最大限に活用した地域包括ケアシステムを構想するということが可能になります。すべてをフォーマルなサービスで対応するというのではなく、これはよく「共助」といわれるものになるかもしれませんが、地域住民との協働の中でその地域にあったオーダーメイドの地域包括ケアシステムを構築していくことに、この地域住民のパワーが貢献できると言えると思います。地域包括ケアシステムの構築に参加する住民が増えるわけです。

最後に「自助」「互助」によるサポートは、例えば介護保険のサービスや医療サービスの代替的な役割は果たせないということをもとめておきたいと思います。地域住民のパワーを高めることがとても大事だという私自身の立場は変わりません。しかし、すべてを解決したり、対応したり、何かを安上がりややっていくために地域住民のパワーを高めましょう、ということは、違うのではないかと考えています。地域住民のパワーを維持したり高めたりするのにもコストはかかります。地域住民のパワーを高めていくアプローチをするのにも、コストはかかりますし、かけていかななくてはいけないのではないかと考えています。

同時に、フォーマルなサービスが「必要だ」と思ったときに使える体制がなければ、本当にその地域で可能な限り住み続けられる、という地域包括ケアシステムの構築はできないと思っています。

拙い話で大変恐縮でしたけれども、以上で私の話を終わらせていただきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。(拍手)

※本稿は、平成26年3月25日に開催された長崎純心大学医療・福祉連携センター主催の講演会での講演に加筆、修正したものである。

本稿は、文部科学省の「平成25年度 未来医療研究人材養成拠点形成事業【テーマB】リサーチマインドを持った総合診療医の養成」に係る研究成果の一部である。

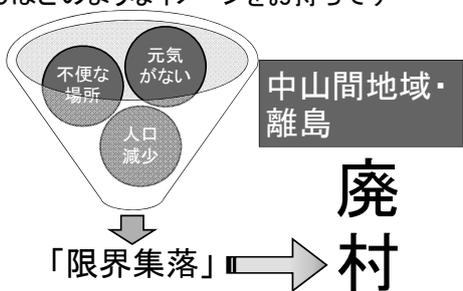
(講演資料)

**限界集落における
地域包括ケアシステムへの取り組み
～地域住民のエンパワメントに着眼して～**

渡辺裕一(武蔵野大学)
平成26年3月25日(火)14:50～16:20
長崎純心大学医療・福祉連携センター講演会
テーマ:「地域包括ケアシステムの構成要素について考える」

高齢化が進んだ地域

• 皆さんはどのようなイメージをお持ちですか？



中山間地域・
離島

**廃
村**

2

「限界集落」

• 「65歳以上の高齢者が集落人口の50%を超え、冠婚葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落」

(大野晃『限界集落と地域再生』,2008)

3

廃村の理由は「高齢化が進んだから」

• 本当にそれだけですか？
• 何でも「としのせい」にしているのか？
• 高齢化によって失われたものは何？



4

39.9%

• 2060年における我が国の人口に65歳以上人口が占める割合
• 限られた自治体を除き、「限界集落化」するだろうという現実。
• 「地域の衰退(限界集落化→廃村)」が高齢化によるものであれば、日本は将来どうなるのか？

5

「地域の衰退(限界集落化→廃村)」

• **高い高齢化率のほか、**

• 働く場がなくなり、
• 日々の買い物や通院に事欠き、
• 田畑や山林の管理、
• 冠婚葬祭も難しくなり、
→その末に待ち受ける「廃村」へ

(財団法人農村開発企画委員会「限界集落における集落機能の実態に関する調査報告書」,2007)

6

2,643

- ・「10年以内に消滅の可能性(423集落)」+「いずれ消滅する可能性」のある集落の数
- ・これらの集落では集落機能の維持が困難になったことで
- ・耕作放棄地の増大
- ・空き家の増加
- ・森林の荒廃
- ・ごみの不法投棄
- ・獣害・病虫害の発生、といった問題が発生
(国土交通省国土計画局総合計画課「平成18年度国土計画策定のための集落の状況に関する現状把握調査」2007)

7

「としのせい」だけではない、失われているものがある

- ・地域住民同士のつながりをはじめとする、人と人とのつながり
- ・地域住民の生活を支えようという意識、貢献への意欲
- ・地域の課題の共有意識
- ・地域住民のパワー



8

地域住民のパワー

- ・地域の生活問題に向き合い、主体的に問題解決しようとする地域住民の力



9

地域包括ケアシステム

地域包括ケアシステムの5つの構成要素と「自助・互助・共助・公助」

【新しい住まい方】
 ●生活の基盤として、高齢者や障害者が、本人の希望と経済力に合った住まい方が確保されていることが地域包括ケアシステムの実現に必要。高齢者がフレイルや認知症などに陥らないよう支援が必要。

【生活支援・福祉サービス】
 ●生活の能力低下、経済的困窮、健康状態の変化などにより暮らしが困難な高齢者や障害者を支援する。生活支援には、食料・生活必需品、サービスなど多岐にわたる。高齢者の受けやすさや多様なニーズに応えるため、多岐にわたるサービスを提供する必要がある。

【介護・医療・予防】
 ●高齢者の暮らしを支えるためには、介護・医療・予防が専門職によって提供される（医療的に適切な「予防・診断」やケアマネジメントなど）が、必要に応じて生活支援と一体的に提供。

【本人・家族の選択と心構え】
 ●高齢者や障害者の暮らしが主体的に決まる中で、在宅生活を継続することの難しさを、本人や家族が理解し、そのための心構えを持つことが重要。

【自助・互助・共助・公助】からみた地域包括ケアシステム

【自助】による自立
 ●高齢者や障害者が、生活に必要なサービスや支援を自ら確保し、生活の自立を目指す。

【互助】による相互支援
 ●高齢者や障害者が、互いに助け合い、生活の困難を軽減する。

【共助】による相互支援
 ●高齢者や障害者が、互いに助け合い、生活の困難を軽減する。

【公助】による支援
 ●高齢者や障害者が、生活に必要なサービスや支援を自ら確保し、生活の自立を目指す。

【高齢者による自立】
 ●高齢者は、生活に必要なサービスや支援を自ら確保し、生活の自立を目指す。自助・互助・共助・公助の役割があり、「自助」に自分自身で対応できるように、自助サービスの購入も含まれる。自助には、「自助」は自助に必要となる心構えや準備が必要であるが、費用負担が制度的に受けられない「自助」の役割がある。

【自助や共助による自立】
 ●自助や共助では、高齢者や障害者のみで暮らすことが難しく、「自助」「互助」の概念や準備が必要。自助や共助には、自助・互助を維持することが難しい一方、自助サービスが自助によるサービス購入が可能。都市部以外の地域は、民間市場が限定的だが「自助」「互助」の役割がある。

●自助や共助は、自助・互助の両方とも必要とする。自助・互助の両方とも必要とする。自助・互助の両方とも必要とする。

10

地域包括ケアシステムと限界集落の現状

- ・集落の中に、【すまいとすまい方】の選択肢はない。
- ・専門的な【福祉サービス】の提供者は少ない。
=介護の必要な住民はほとんどいない。
- ・【介護・医療・予防】の専門職の不在(少ない)。
=医師(病院・診療所)、保健師、社会福祉士の不在
- ・『自助(専門的サービスの購入は含まない)』『互助』は『共助』『公助』を代替しない(できない)。
=もともと代替することは期待できない、「自助」「互助」が果たす役割の限界
=高齢化による手段的サポート提供の限界化
- ・「プライバシーの保護」と『自助』『近隣住民の声かけや見守り』の矛盾

11

限界集落A調査

12

調査対象地域の概要

- 足利家(室町幕府)の落ち武者伝説もあるが、その前の縄文時代から人は住んでいた様子
- 中山間地域に位置し、現在、高齢化率は約57%、人口は約400人(住民基本台帳上)
- 合併により、市の一部になった
- 産業は炭焼き、農業(こんにやく、ほうれん草など)、昔は養蚕(絹糸)
- 1本の川に沿って、4つの集落から構成される
- 空き家がかかり目立つ状況

13

人口の推移(国勢調査) (客観的指標)

	S60	H2	H7	H12	H17	H24	H25
総人口	843	742	651	590	521	454	438
0-14歳	110	90	61	52	30	25	25
%	13.0	12.1	9.4	8.8	5.8	5.5	5.7
15-64歳	498	397	310	253	221	180	162
%	59.1	53.5	47.6	42.9	42.4	39.6	37.0
65歳~	235	255	280	285	270	249	251
%	27.9	34.4	43.0	48.3	51.8	54.9	57.3
世帯数(戸)	281	273	264	257	234	218	215
世帯人員平均	3.00	2.72	2.47	2.30	2.23	2.08	2.04

14

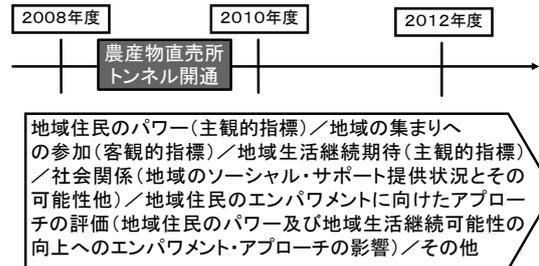
子どもの数の推移 (客観的指標)

	S48	S60	H2	H8	H12	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25
保育園児	32	17	17			7	6	8	7	6	4	4	1
小学生				36	19	12	16	18	15	13	13	12	12
中学生				16	22	17	21	20	22				(12)

※平成8年度から山村親子留学制度を導入

15

調査の全体像



16

調査の対象と方法

- 対象
山梨県限界集落Aで暮らしている20歳以上の方すべて
- 方法
最新の住宅地図上にある全戸を訪問して調査票を配布、回収する配票留置法
横断調査の繰り返し実施によるデータ(RCD)

17

回収の結果

- 2008年度(2009年3月実施)
268件を配布、有効回答は175件(約65%)
- 2010年度(2011年3月実施)
230件を配布、有効回答は187件(約81%)
- 2012年度(2013年3月実施)
228件を配布、有効回答は186件(82%)

18

回答者の基本的属性の分布(性別)

			性別		合計
			男	女	
調査年	09	度数	79	91	170
		%	46.5%	53.5%	100.0%
	11	度数	90	96	186
		%	48.4%	51.6%	100.0%
	13	度数	86	100	186
		%	46.2%	53.8%	100.0%
合計		度数	255	287	542
		%	47.0%	53.0%	100.0%

19

回答者の基本的属性の分布(年齢)

			年齢							合計		
			20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代		90代以上	
調査年	09	度数	4	7	15	23	24	53	33	6	165	
		%	2.4%	4.2%	9.1%	13.9%	14.5%	32.1%	20.0%	3.6%	100.0%	
	11	度数	6	16	13	24	43	52	23	5	182	
		%	3.3%	8.8%	7.1%	13.2%	23.6%	28.6%	12.6%	2.7%	100.0%	
	13	度数	4	7	11	22	37	49	45	4	179	
		%	2.2%	3.9%	6.1%	12.3%	20.7%	27.4%	25.1%	2.2%	100.0%	
	合計		度数	14	30	39	69	104	154	101	15	526
			%	2.7%	5.7%	7.4%	13.1%	19.8%	29.3%	19.2%	2.9%	100.0%

20

回答者の基本的属性の分布(学歴)

			最終学歴				合計
			義務教育(旧制高等学校含む)	高校(旧制中学校含む)	短大・高専(旧制高校も含む)	大学(在学中、大学院も含む)	
調査年	09	度数	94	49	13	9	165
		%	57.0%	29.7%	7.9%	5.5%	100.0%
	11	度数	75	74	19	15	183
		%	41.0%	40.4%	10.4%	8.2%	100.0%
	13	度数	94	60	18	13	185
		%	50.8%	32.4%	9.7%	7.0%	100.0%
合計		度数	263	183	50	37	533
		%	49.3%	34.3%	9.4%	6.9%	100.0%

21

地域の集まりへの参加の変化(町内会の会合)

			あなたは地域の集まりに参加していますか? (町内会の会合)		合計
			いいえ	はい	
調査年	09	度数	73	97	170
		%	42.9%	57.1%	100.0%
	11	度数	81	105	186
		%	43.5%	56.5%	100.0%
	13	度数	83	104	187
		%	44.4%	55.6%	100.0%
合計		度数	237	306	543
		%	43.6%	56.4%	100.0%

22

地域の集まりへの参加の変化(地域の葬式など)

			あなたは地域の集まりに参加していますか? (地域の葬式など)		合計
			いいえ	はい	
調査年	09	度数	37	133	170
		%	21.8%	78.2%	100.0%
	11	度数	50	136	186
		%	26.9%	73.1%	100.0%
	13	度数	46	141	187
		%	24.6%	75.4%	100.0%
合計		度数	133	410	543
		%	24.5%	75.5%	100.0%

23

地域の集まりへの参加の変化(町内清掃)

			あなたは地域の集まりに参加していますか? (町内清掃)		合計
			いいえ	はい	
調査年	09	度数	42	128	170
		%	24.7%	75.3%	100.0%
	11	度数	54	132	186
		%	29.0%	71.0%	100.0%
	13	度数	60	127	187
		%	32.1%	67.9%	100.0%
合計		度数	156	387	543
		%	28.7%	71.3%	100.0%

24

地域の集まりへの参加の変化
(寺・神社の祭り)

調査年	09	度数	あなたは地域の集まりに参加していますか？ (寺・神社の祭り)		合計
			いいえ	はい	
			50	120	
	%	29.4%	70.6%	100.0%	
	11	度数	66	120	186
		%	35.5%	64.5%	100.0%
	13	度数	58	129	187
		%	31.0%	69.0%	100.0%
合計		度数	174	369	543
		%	32.0%	68.0%	100.0%

25

地域の集まりへの参加の変化
(老人クラブの集まり)※60歳以上

調査年	09	度数	あなたは地域の集まりに参加していますか？ (老人クラブの集まり)		合計
			いいえ	はい	
			33	79	
	%	29.5%	70.5%	100.0%	
	11	度数	58	64	122
		%	47.5%	52.5%	100.0%
	13	度数	59	76	135
		%	43.7%	56.3%	100.0%
合計		度数	150	219	369
		%	40.7%	59.3%	100.0%

※5%水準で有意 26

地域の集まりへの参加の変化
(村民運動会)

調査年	09	度数	あなたは地域の集まりに参加していますか？ (村民運動会)		合計
			いいえ	はい	
			73	97	
	%	42.9%	57.1%	100.0%	
	11	度数	75	111	186
		%	40.3%	59.7%	100.0%
	13	度数	61	126	187
		%	32.6%	67.4%	100.0%
合計		度数	209	334	543
		%	38.5%	61.5%	100.0%

27

地域の集まりへの参加の変化
(防災訓練)

調査年	09	度数	あなたは地域の集まりに参加していますか？ (防災訓練)		合計
			いいえ	はい	
			32	138	
	%	18.8%	81.2%	100.0%	
	11	度数	51	135	186
		%	27.4%	72.6%	100.0%
	13	度数	44	143	187
		%	23.5%	76.5%	100.0%
合計		度数	127	416	543
		%	23.4%	76.6%	100.0%

28

地域の集まりへの参加の変化
(無尽)

調査年	09	度数	あなたは地域の集まりに参加していますか？ (無尽)		合計
			いいえ	はい	
			135	35	
	%	79.4%	20.6%	100.0%	
	11	度数	147	39	186
		%	79.0%	21.0%	100.0%
	13	度数	154	33	187
		%	82.4%	17.6%	100.0%
合計		度数	436	107	543
		%	80.3%	19.7%	100.0%

29

地域の集まりへの参加の変化
(近所の人同士のお茶飲み会)

調査年	09	度数	あなたは地域の集まりに参加していますか？ (近所の人同士のお茶のみ会)		合計
			いいえ	はい	
			83	87	
	%	48.8%	51.2%	100.0%	
	11	度数	116	70	186
		%	62.4%	37.6%	100.0%
	13	度数	106	81	187
		%	56.7%	43.3%	100.0%
合計		度数	305	238	543
		%	56.2%	43.8%	100.0%

※5%水準で有意 30

ソーシャルサポート提供の変化 (一人暮らし高齢者への定期訪問)

		あなたはひとり暮らしの高齢者宅に定期的に訪問して話を聞いたことがありますか？					合計	
		よくある	まあある	どちらとも言えない	あまりない	まったくない		
調査年	09	度数	23	31	13	47	45	159
		%	14.5%	19.5%	8.2%	29.6%	28.3%	100.0%
	11	度数	23	36	10	53	62	184
		%	12.5%	19.6%	5.4%	28.8%	33.7%	100.0%
	13	度数	26	38	11	58	44	177
		%	14.7%	21.5%	6.2%	32.8%	24.9%	100.0%
合計	度数	72	105	34	158	151	520	
	%	13.8%	20.2%	6.5%	30.4%	29.0%	100.0%	

31

ソーシャルサポート提供の変化 (一人暮らし高齢者への定期電話)

		あなたはひとり暮らしの高齢者宅に定期的に電話をかけて様子をうかがったことがありますか？					合計	
		よくある	まあある	どちらとも言えない	あまりない	まったくない		
調査年	09	度数	14	39	8	44	53	158
		%	8.9%	24.7%	5.1%	27.8%	33.5%	100.0%
	11	度数	16	34	7	41	86	184
		%	8.7%	18.5%	3.8%	22.3%	46.7%	100.0%
	13	度数	13	31	12	61	59	176
		%	7.4%	17.6%	6.8%	34.7%	33.5%	100.0%
合計	度数	43	104	27	146	198	518	
	%	8.3%	20.1%	5.2%	28.2%	38.2%	100.0%	

32

ソーシャルサポート提供の変化 (食事会の開催(手伝い))

		あなたは高齢者のためのお食事会を開いた(手伝った)ことがありますか？					合計	
		よくある	まあある	どちらとも言えない	あまりない	まったくない		
調査年	09	度数	5	13	10	32	95	155
		%	3.2%	8.4%	6.5%	20.6%	61.3%	100.0%
	11	度数	4	9	4	39	125	181
		%	2.2%	5.0%	2.2%	21.5%	69.1%	100.0%
	13	度数	5	10	10	56	92	173
		%	2.9%	5.8%	5.8%	32.4%	53.2%	100.0%
合計	度数	14	32	24	127	312	509	
	%	2.8%	6.3%	4.7%	25.0%	61.3%	100.0%	

33

ソーシャルサポート提供の変化 (食事の配達)

		あなたはお弁当を作って高齢者のお宅へ配達した(手伝った)ことがありますか？					合計	
		よくある	まあある	どちらとも言えない	あまりない	まったくない		
調査年	09	度数	2	10	9	28	102	151
		%	1.3%	6.6%	6.0%	18.5%	67.5%	100.0%
	11	度数	2	4	6	35	135	182
		%	1.1%	2.2%	3.3%	19.2%	74.2%	100.0%
	13	度数	7	11	5	35	119	177
		%	4.0%	6.2%	2.8%	19.8%	67.2%	100.0%
合計	度数	11	25	20	98	356	510	
	%	2.2%	4.9%	3.9%	19.2%	69.8%	100.0%	

34

ソーシャルサポート提供の変化 (定期的声掛け)

		あなたは気になった高齢者に定期的声をかけたことがありますか？					合計	
		よくある	まあある	どちらとも言えない	あまりない	まったくない		
調査年	09	度数	23	50	12	37	39	161
		%	14.3%	31.1%	7.5%	23.0%	24.2%	100.0%
	11	度数	25	50	14	36	58	183
		%	13.7%	27.3%	7.7%	19.7%	31.7%	100.0%
	13	度数	28	45	17	51	40	181
		%	15.5%	24.9%	9.4%	28.2%	22.1%	100.0%
合計	度数	76	145	43	124	137	525	
	%	14.5%	27.6%	8.2%	23.6%	26.1%	100.0%	

35

ソーシャルサポート提供の変化 (様子見守り)

		あなたは「最近顔を見ないな」と思った高齢者のお宅に様子を見に行ったことがありますか？					合計	
		よくある	まあある	どちらとも言えない	あまりない	まったくない		
調査年	09	度数	26	34	8	40	51	159
		%	16.4%	21.4%	5.0%	25.2%	32.1%	100.0%
	11	度数	22	45	14	37	67	185
		%	11.9%	24.3%	7.6%	20.0%	36.2%	100.0%
	13	度数	24	52	15	49	43	183
		%	13.1%	28.4%	8.2%	26.8%	23.5%	100.0%
合計	度数	72	131	37	126	161	527	
	%	13.7%	24.9%	7.0%	23.9%	30.6%	100.0%	

36

ソーシャルサポート提供の変化 (買い物の付き添い)

		あなたは高齢者の買い物に付き添ったことがありますか？					合計	
		よくある	まあある	どちらとも言えない	あまりない	まったくない		
調査年	09	度数	8	17	15	39	79	158
		%	5.1%	10.8%	9.5%	24.7%	50.0%	100.0%
11		度数	9	15	12	38	111	185
		%	4.9%	8.1%	6.5%	20.5%	60.0%	100.0%
13		度数	9	17	11	47	92	176
		%	5.1%	9.7%	6.3%	26.7%	52.3%	100.0%
合計		度数	26	49	38	124	282	519
		%	5.0%	9.4%	7.3%	23.9%	54.3%	100.0%

37

ソーシャルサポート提供の変化 (通院の付き添い)

		あなたは高齢者の通院に付き添ったことがありますか？					合計	
		よくある	まあある	どちらとも言えない	あまりない	まったくない		
調査年	09	度数	17	21	15	31	76	160
		%	10.6%	13.1%	9.4%	19.4%	47.5%	100.0%
11		度数	14	21	9	39	102	185
		%	7.6%	11.4%	4.9%	21.1%	55.1%	100.0%
13		度数	15	20	8	51	80	174
		%	8.6%	11.5%	4.6%	29.3%	46.0%	100.0%
合計		度数	46	62	32	121	258	519
		%	8.9%	11.9%	6.2%	23.3%	49.7%	100.0%

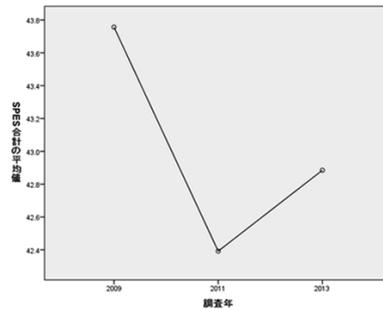
38

ソーシャルサポート提供の変化 (相談の付き添い)

		あなたは高齢者が市役所や支所へ相談に行くときに付き添ったことがありますか？					合計	
		よくある	まあある	どちらとも言えない	あまりない	まったくない		
調査年	09	度数	5	8	12	39	92	156
		%	3.2%	5.1%	7.7%	25.0%	59.0%	100.0%
11		度数	6	8	8	42	120	184
		%	3.3%	4.3%	4.3%	22.8%	65.2%	100.0%
13		度数	4	7	5	61	100	177
		%	2.3%	4.0%	2.8%	34.5%	56.5%	100.0%
合計		度数	15	23	25	142	312	517
		%	2.9%	4.4%	4.8%	27.5%	60.3%	100.0%

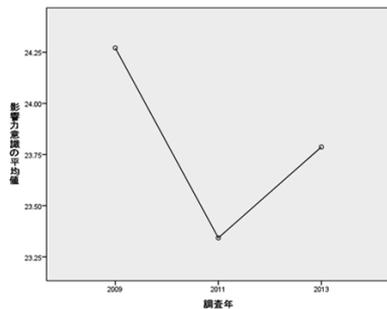
39

地域住民のパワーの変化 (合計得点)



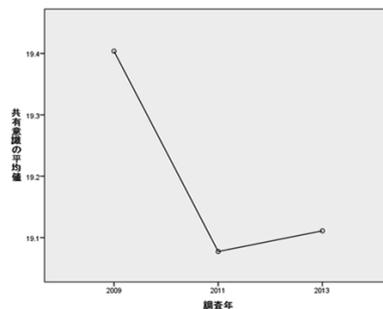
40

地域住民のパワーの変化 (影響力意識)



41

地域住民のパワーの変化 (共有意識)



42

ひとり暮らし時永住希望(期待)の変化 (元気時)

調査年	度数	もしあなたがひとり暮らしになったとしたらどこで暮らしたい？(あなたが元気な場合)				合計
		ひとり暮らしになっても、市Aで暮らし続けたい	ひとり暮らしになったら、他の市町村に家族の家に同居したい	ひとり暮らしになったら、他の市町村でひとり暮らしがしたい	その他	
09	度数	128	19	14	7	168
	%	76.2%	11.3%	8.3%	4.2%	100.0%
11	度数	144	24	8	8	184
	%	78.3%	13.0%	4.3%	4.3%	100.0%
13	度数	136	24	15	7	182
	%	74.7%	13.2%	8.2%	3.8%	100.0%
合計	度数	408	67	37	22	534
	%	76.4%	12.5%	6.9%	4.1%	100.0%

43

ひとり暮らし時永住希望(期待)の変化 (他人の世話必要時)

調査年	度数	もしあなたがひとり暮らしになったとしたらどこで暮らしたい？(あなたが生活上支援が必要な場合)				合計
		ひとり暮らしになっても、市Aで暮らし続けたい	ひとり暮らしになったら、他の市町村に同居したい	ひとり暮らしになったら、他の市町村でひとり暮らしがしたい	その他	
09	度数	86	51	14	14	165
	%	52.1%	30.9%	8.5%	8.5%	100.0%
11	度数	95	57	12	15	179
	%	53.1%	31.8%	6.7%	8.4%	100.0%
13	度数	93	52	16	21	182
	%	51.1%	28.6%	8.8%	11.5%	100.0%
合計	度数	274	160	42	50	526
	%	52.1%	30.4%	8.0%	9.5%	100.0%

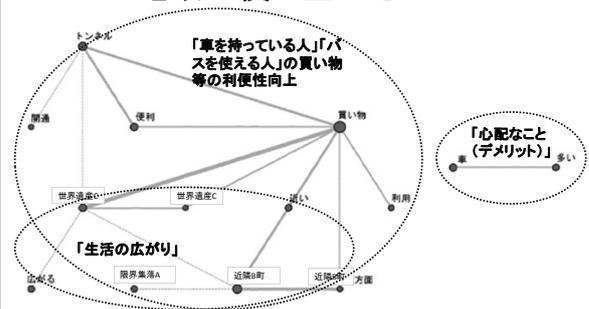
44

「農産物直売所」は 地域住民のエンパワメントに寄与したか

- 2011より2013で、「買い物」「食事」の利用は有意に高い。
- 2011-2013で、「運営」や「出資」、「出品」への参加に有意差なし。
- 「買い物」「食事」に利用しているか否かで、パワー得点に有意差なし。
- 「運営」、「出資」、「出品」に参加する住民のパワー得点は有意に高い。
- パワーを持った人が集まり、そのパワーを発揮する機会を得た可能性示唆

45

「トンネル」は 地域の役に立ったのか



46

地域住民のエンパワメントによって、 何が得られるか

- 地域への永住希望を高められる
 - 安全性にリスクがあっても暮らし続けたい
- 地域包括ケアシステム構築への参加・貢献意識を高められる
 - 地域の問題解決に向けたアイデア検討
 - 認知症サポーター養成講座、介護講座受講
 - 地域の問題解決への参加(見守り、声掛け、お茶のみ会、各種ボランティア)

47

地域住民のパワーは 「可能な限り住み慣れた地域での 生活を継続」を実現したか

- 地域住民のパワーを維持し、高めるためのコストはかけられていない
- 親は子どもに「この地域には帰ってきてはいけない。近隣の便利なところに家を建てなさい」と貯めたお金を出資。高齢でひとり暮らしになったら呼び寄せられるという結果・・・
- 介護が必要になったら、集落外の施設に入る
→要介護度が重度の高齢者を見かけない地域になっている(介護が必要な高齢者は地域での生活から排除されている)

48

地域包括ケアシステムの構成要素
としての地域住民のパワー

- **可能な限り**住み慣れた地域で生活を継続することができる(したくなる)ような地域住民の動機づけ
- 地域の強み(持ち得るもの)を最大限に活用した地域包括ケアシステム構想の根拠
- 「自助」「互助」は、「公助」「共助」の代替役割は果たせない。

49

ご清聴ありがとうございました

50